

# ラクダの個体識別に関する一考察 ——アラシャー右旗バダインジリン砂漠のモンゴル牧畜民を事例に

A Study on Individual Identification of Camels

: Case of Mongolian Pastoral People's in Alax Right Banner, Badain Jaran Desert

ソロンガ  
Solongga

**要旨** 家畜に個性性を認め、それを文化的に表現する現象はほぼ全ての牧畜社会においてみられる現象である。ここでは家畜の個体を表す様々な名称を一般的類別に関するものと個別的特徴に関するものという二つのグループに分けている。ただし、牧畜地域の違いおよび類別カテゴリーの違いによって、家畜の個体をあらわす名称が異なっている。

本稿では、モンゴル牧畜社会において牧畜の対象となっているラクダを取り上げ、その個体を表現する呼称を詳細に記述する。内モンゴル自治区アラシャー盟アラシャー右旗バダインジリン砂漠に暮らすラクダ牧畜民を事例として、ラクダの個体を表現する呼称を具体的にラクダの成長段階、年齢と性別、毛、コブ、体つき、足跡という6つの面から述べる。ラクダの個体を表現する呼称を記述することを通じて、牧畜文化の一側面を理解しようとするのが本稿の目的である。

## はじめに

家畜に個性性を認め、それを文化的に表現する現象は、アフロ・ユーラシア内陸乾燥地 [今村2012、梅棹1990、波佐間2015、堀内1986、2015]、シベリア [高倉2000、吉田2006]、南米アンデス [稲村1995] など、ほぼ全ての牧畜社会においてみられる現象である。ここでは家畜の個体を表す様々な名称を一般的類別に関するものと個別的特徴に関するものという二つのグループに分けている [梅棹1990: 521]。一般的類別というのは、家畜のオスかメスか、何歳であるかなどの、いわば生物学的状況を類別的に表したものである。個別的特徴というのは、たとえば毛色、斑紋、眼の色、くせなどについての、その個体の特徴をあらわしたものである [梅棹1990: 521、522]。

モンゴルおよび内モンゴルの家畜の名称に関しては、民俗学的な研究が多く行われている [C.ブヤントグトフ1988、ムンクジラガラ2006、セ・ジャンバルドルジ2008]。これらの研究においては家畜の名称を分類し、語彙の面で分析している。ただし牧畜地域の違いおよび類別カテゴリーによっては、家畜の個体をあらわす名称が異なっている。こうした研究を念頭に置きつつ、本稿ではラクダの個体を表現する呼称を詳細に記述する。

モンゴル語で「家畜」というのは、マル (*mal*)<sup>1)</sup>である。マルは、牧畜対象になる生産家畜だけを意味する [梅棹1990: 521]。モンゴル牧畜社会において牧畜の対象となってい

<sup>1)</sup> 本稿で使用する用語の表記は、モンゴル語のローマ字表記とカタカナ表記を併用した。初出後はカタカナのみで統一した。モンゴル語をローマ字表記する際に、シ・ドナルブ (2000) の『現代モンゴル語辞典』によって記述した。また、現地で使われている現地語の地名、植物の名称、ラクダの体つきを示す形容詞については、発音に近い表記を採用した。

る生産家畜はラクダ、ヤギ、ヒツジ、ウシ、ウマの五種類である。この五種類の家畜をモンゴル語でタブン・ホショー・マル (*tabun hoshuu mal*) という。本稿で取り上げるのは、ラクダで、モンゴル語でテメー (*temee*) という。

本稿では、内モンゴル自治区アラシャー盟アラシャー右旗バダインジリン砂漠に暮らすラクダ牧畜民を事例に、牧畜民がラクダをどのように認識し、分類しているかを、成長段階、年齢と性別による名称、毛による名称、コブによる名称、体格による名称、足跡による名称という側面から探っていく。ラクダの個体を表現する呼称を記述することを通じて、牧畜文化の一側面を理解しようとするのが本稿の目的である。

## 1. バダインジリン砂漠の概要

### 1.1 バダインジリン砂漠の自然環境

内モンゴル自治区（以下内モンゴル）は中国の北部に位置し（図1）、中国内陸乾燥地域に属する。アラシャー盟は内モンゴルの最西端に位置する（図1）。その行政組織はアラシャー右旗、アラシャー左旗、エゼネ旗の3つの旗<sup>2)</sup>からなっている（図1）。内モンゴルの西南部から西部にかけては砂丘地帯が、最西部には礫砂漠地帯が広がる〔児玉2012：8〕。アラシャー盟には、テングリ（勝格里）砂漠、バダインジリン（巴丹吉林）砂漠、オランプホ（烏蘭布和）砂漠という三つの砂漠が広範囲に分布している。

アラシャー右旗はアラシャー盟の中部に位置する（図1）。総面積は7万2556km<sup>2</sup>、日本の総面積のおよそ5分の1に相当する。アラシャー右旗の標高は西部が最も高く2,500m以上、東部に向かうに従い低くなり、東部では900m近くになる。南部と西南部は山地、西北部は砂漠<sup>3)</sup>である。北、東、西にはゴビ<sup>4)</sup>、丘陵地帯が広がっている。

本稿で取り上げるバダインジリン砂漠はアラシャー右旗の西北部に位置し（図2）、中国第三の広さをもつ砂漠である。標高は1,200～1,700mで、砂峰<sup>5)</sup>の高さは300～500mである。総面積は4.71万km<sup>2</sup>、全アラシャー右旗土地面積の64.9%を占める。年平均気温は7～8℃である。最寒月は1月で最低気温は-33.1℃、最暖月は7月で最高気温は41℃に達する。年平均降水量は50～60mmで、降雨の特徴は6月から8月に集中し、年平均蒸発量は3,500mm強である。年平均風速度は4m/秒で、西北風が多い。砂漠の主な植物はジャグ<sup>6)</sup>、ソハイ<sup>7)</sup>、トルログ<sup>8)</sup>、ハルガナ<sup>9)</sup>、ソリ<sup>10)</sup>などである〔児玉2012：29〕。

### 1.2 バダインジリン砂漠の牧畜民および家畜の放牧特徴

アラシャー右旗の生業は牧畜である。主な飼養家畜はラクダ、ヤギ、ヒツジ、ウシ、ロバである。家畜の頭数は約21万頭で、そのうちラクダの頭数は6.8万頭である。

2) 旗とは、内モンゴルの行政単位で、日本の郡に相当する。

3) 砂漠 (Sandy desert) とは、植覆率が5%以下の流動砂丘地帯である〔児玉2012：113〕。

4) ゴビ (Gobi, Gravel desert) とは、礫石を主とする植覆率が5%以下の土地である〔児玉2012：113〕。本来はゴビとはモンゴル語で、それがそのまま地理用語になったものである。

5) 砂漠が山のように聳え立つ様子をいう。

6) モンゴル語で *zag*、中国語で梭梭、学名は *Haloxyylon ammodendron*。

7) モンゴル語で *suhai*、中国語で紅柳、学名は *Tamarix ramosissima*。

8) モンゴル語で *torlug*、中国語で羊柴、学名は *Hedysarum laeve* Maxim.

9) モンゴル語で *hargana*、中国語で中间锦鸡儿、学名は *Caragana intermedia* Kuang et H.C.Fu.

10) モンゴル語で *suli*、中国語で沙鞭、学名は *Psammochloa villosa* (Trin) Bor.

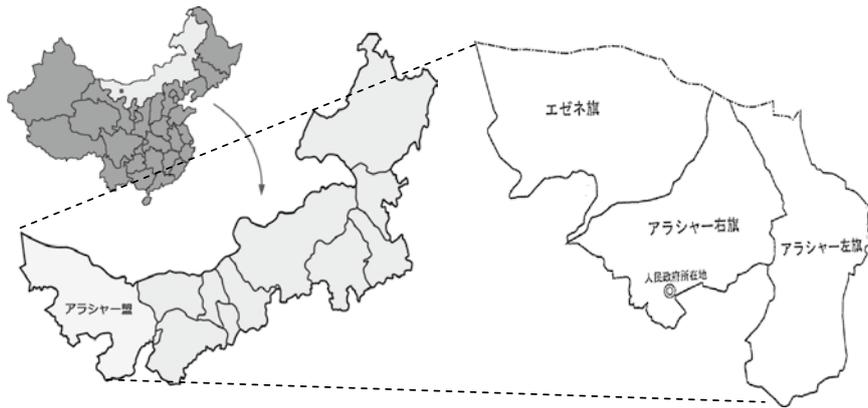


図1 内モンゴル自治区アラシャー盟位置図 (Google地図により作成)



図2 アラシャー右旗バダインジリン砂漠の位置 (Google地図により作成)

バダインジリン砂漠地域はアラシャー右旗のヤブライ鎮<sup>11)</sup>バダインジリン・ガチャ<sup>12)</sup>の管轄下にある。バダインジリン・ガチャ<sup>13)</sup>は2010年に成立した。当ガチャはバダインジリン砂漠地域に暮らしてきた牧畜民により形成されたものである。牧畜民たちはバダインジリン砂漠の湖沼と、その周縁地帯に暮らしている。2014年時点でガチャの人口は120人で43世帯である。120人のうち、モンゴル人が98人で約82%、漢人が22人で約18%を占める。43世帯の中で、24世帯が現在バダインジリン砂漠に暮らしていない。主にアラシャー右旗の旗中心とヤブライ鎮に暮らしている。主な家畜はラクダ、ヤギ、ヒツジである。全ガチャ

<sup>11)</sup> アラシャー右旗の3つの鎮の一つである。

<sup>12)</sup> 内モンゴルの行政単位で村に相当する。

<sup>13)</sup> 1958年に、バダインジリン・バグとして成立し、アラシャー右旗人民政府の管轄下にあった。1980年から1990年まではアラシャー右旗サラタイ・ソムの管轄下であり、1991年から1999年まではヤブライ・ソムの管轄下にあった。1999年から現在まではサラタイ・ソムとヤブライ・ソムを合併し成立したヤブライ鎮の管轄下にある。

の2013年から2014年6月までの家畜総数は4,999頭である。内訳は、ヤギが2,699頭で54%を占め、次いでヒツジが1,216頭で24.3%、ラクダが984頭で19.7%、ウシが91頭で1.8%、ロバが9頭で0.2%である。

当該ガチャの土地はすべてガチャの所有地であるが、使用権は1984年の第一次分配と1997年の第二次分配<sup>14)</sup>によって世帯単位で私有化され、牧草地の分配が明確化された。現在ガチャの牧草地総面積は26万畝（1畝は約667m<sup>2</sup>）である。ただし、実際の牧草地の使用状況は季節によって異なる。基本的には、11月から翌年の5月まで、つまり冬から春には分配通り各自の牧草地を使用する。5月から10月下旬まで、つまり夏から秋までの期間においては、牧草地は分配前と同じくガチャ共用となる。牧畜民の五畜別の牧草地使用から見ると、ラクダは11月から4月中旬までは冬営地で、4月下旬から5月上旬までの1ヵ月間は春営地に放牧する。その後、5月下旬から10月下旬まで当ガチャの土地を越えて、周辺のガチャを含むゴビ草原、砂漠地域で分配された牧草地に関係なくガチャ内で自由に遊牧する。ヤギとヒツジは6月から10月の間、分配された牧草地に関係なくガチャ内で自由に遊牧する。11月から5月末までは牧営地で放牧する。遊牧の間、泉の水、河の水、雨水は家畜の飲用水になる。冬はこれらの水が凍るため、分配地にある井戸を利用する。降雪量が多い年は井戸を利用する必要が低くなる。

## 2. 調査方法・対象

本稿は内モンゴル自治区アラシャー盟アラシャー右旗バダインジリン砂漠での現地調査<sup>15)</sup>にもとづいている。調査対象はラクダ牧畜民のS氏（2016年現在31歳、1985年生まれ）とB氏（2016年現在68歳、1948年生まれ）である。ラクダ牧畜民の家で住み込み、聞き取り調査を行った。可能な範囲で住み込み家族の労働に従事し、ラクダ牧畜民が牧畜生活の中でラクダをどのように呼び分けているのかを確認した。

## 3. 成長段階、年齢と性別による名称

ラクダの名称は、次の表1に見るように成長段階、年齢と性別によって分節されている。

### 3.1 成長段階による名称

まず、ラクダを成長段階によって幼畜、若年、成年、老年という4つに分類する（表1）。

幼畜はモンゴル語でトロー（*tol*）と呼ばれる。生まれてから2歳まで母乳を飲み、離乳期を達した個体を指す。この段階で、離乳していない個体はほとんど売却、騎乗、肉、毛、皮革を利用しない。離乳期に達して、草を食べるようになった個体は場合によって、売却と毛の利用対象となる。

若年はウス布林・テメー（*osburiin temee*）と呼ばれる。3歳から5歳までの個体を指す。ウスブリ（*osbur*）とは、「発育している、成長している」という意味である。ラクダ

<sup>14)</sup> 1984年に実施された第一次放牧地使用权分配で共有地を除くガチャの牧草地を各世帯に分配した。分配は各湖沼の草量を基本として決めた。第二次放牧地使用权分配が1997年に実施され、これは1984年の整理整頓である。新しくできた子供世帯を分子世帯にする要望がある牧草地について、1984年に分配された牧草地を再分割した。

<sup>15)</sup> 現地調査は2013年8月15日～28日、2014年8月14日～9月4日、2015年8月30日～9月5日の三回にわたり行った。調間は査期合計39日である。

の性別に関係なく体力、体格、外観などがはっきりする発育盛りの段階である。またメスとオスによって去勢、交尾、妊娠が可能となる時期でもある。売却、騎乗、乳、肉、毛、皮革の利用対象になる。使役に適させ、運搬などの仕事を課せられ始める時期でもある。

成年はナス・グイツスン・テメー (*nas guicesen temee*) という。6歳から16歳までの個体を指す。ナス・グイツス (*nas guicesen*) とは、「成長した、成年になった」という意味である。売却、騎乗、乳、肉、毛、皮などの利用価値と体力、繁殖力が最も優れた段階である。

老齢はホゲシン・テメー (*hogšin temee*) と呼ばれる。ラクダの体力、繁殖力、売却、騎乗、肉、毛、皮の利用価値が徐々に衰微していく段階である。

表1 成長段階と年齢による名称

成長段階	成長段階による名称	年齢	年齢による名称	利用					
				売却	騎乗	乳	肉	毛	皮
幼畜	トロー ( <i>tol</i> )	0-1歳	ボトグ ( <i>botog</i> )	×	×	×	×	×	×
		2歳	トルム ( <i>torom</i> )	○	×	×	×	○	×
若年	ウスブリン・テメー ( <i>osburiin temee</i> )	3歳	グナン・テメー ( <i>gunan temee</i> )	○	○	○	○	○	○
		4歳	デュネン・テメー ( <i>dōnon temee</i> )	○	○	○	○	○	○
		5歳	ジャルー・テメー ( <i>zaluu temee</i> )	○	○	○	○	○	○
成年	ナス・グイツスン・テメー ( <i>nas guicesen temee</i> )	6-16歳	ブデウーン・テメー ( <i>budūun temee</i> )	○	○	○	○	○	○
老齢	ホゲシン・テメー ( <i>hogšin temee</i> )	17歳以上	ホゲシン・テメー ( <i>hogšin temee</i> )	○	○	×	×	○	×

×は利用対象にならないことをあらわす。  
○は利用対象になることをあらわす。

### 3.2 年齢による名称

ラクダの年齢は春の出産期から翌年の春の出産期までの1年が単位になっている。春の出産期を機に名称が変わる。ちなみに、ラクダの寿命はメス・オスを問わず15歳~17歳くらいといわれているが、20歳をこえるラクダもいるという。

年齢によってラクダを0-1歳、2歳、3歳、4歳、5歳、6歳-16歳、17歳以上という7つの年齢段階で呼び分ける(表1)。

0-1歳のラクダ、つまり当年生まれの幼畜をボトグ (*botog*) と呼ぶ。売却、騎乗、乳、肉、毛、皮などの利用対象にならない。

2歳の幼畜をトルム (*torom*) という。売却と毛の利用対象になる。騎乗、乳、肉、皮の利用対象にならない。

3歳のラクダをグナン・テメー (*gunan temee*) と呼ぶ。グナンとは、ラクダ、ウマ、ヤギ、ヒツジ、ウシの3歳の段階を示すモンゴル語である。売却、騎乗、乳、肉、毛、皮

の利用対象になる。

4歳のラクダをデウネン・テメー (*denen temee*) という。デウネンとダウンジンとは、モンゴル語で五畜の4歳をあらわす名詞である。4歳の子供を言う場合もある。

5歳のラクダはジャルー・テメ (*zaluu temee*) という。ジャルー (*zaluu*) とはモンゴル語の「若年、あるいは若い」という意味である。売却、騎乗、乳、肉、毛、皮の利用対象になる。

6歳から16歳のラクダはブデウーン・テメー (*budūun temee*) と呼ばれる。売却、騎乗、乳、肉、毛、皮の利用対象になる。

17歳以上はホゲシン・テメー (*hogšin temee*) という。売却、騎乗と毛の利用対象になるが、乳、肉、皮などの利用対象にならない。

### 3.3 性別・年齢をセットした名称

性別と年齢をあわせてラクダを呼び分けることは、2歳までのラクダにははっきり区別しない。3歳になると、ラクダはメスとオスを呼び分ける。3歳以降は、メスとオスの分類は不均衡になっていく。

#### (1) メス・オスの区別をしない幼畜の名称

ラクダは幼畜の段階まで、つまり約3歳になるまでは基本的に性別を無視して、成長段階に応じてボトグ、トルムと呼ばれる。メス・オスの区別が重要となってくるのが、ともに生殖活動が本格的に可能になる3歳およびその前後であるが、特にメス・オスを言及することが必要な場合には、呼び分けることもある(表2)。

0-1歳のメスの仔ラクダはオヒン・ボトグ (*ohin botog*)、オスの仔ラクダはブーラン・ボトグ (*buuran botog*) と呼ばれる。オヒン (*ohin*) とは、モンゴル語の「娘」の意味で、ラクダに用いる場合はメスの幼獣を意味する。ブーラン (*buuran*) とは、モンゴル語でラクダの種オスを示す形容詞であり、オスの幼獣に用いる。

表2 年齢と性別による名称

成長段階	年齢	性別					
		メス		オス			
幼畜	0-1歳	オヒン・ボトグ ( <i>ohin botog</i> )		ブーラン・ボトグ ( <i>buuran botog</i> )			
	2歳	エメ・トルム ( <i>em torom</i> )		エル・トルム ( <i>er torom</i> )			
若年	3歳	グنز ( <i>gunz</i> )		グナン・タイラグ ( <i>gunan tailag</i> )			
	4歳	インゲ ( <i>inge</i> )	デウジン・インゲ ( <i>dōzin inge</i> )※	去勢オス		種オス	
				アタ ( <i>at</i> )	シネ・アタ ( <i>šin at</i> ) △	タイラグ ( <i>tailag</i> )	デウネン・タイラグ ( <i>dōnen tailag</i> )
	ジャルー・アタ ( <i>zaluu at</i> )		ブーラン・タイラグ ( <i>buuran tailag</i> )※				
5歳	インゲ ( <i>inge</i> )		アタ ( <i>at</i> )		ブール ( <i>buur</i> )		
成年	6-16歳	ホゲシン・インゲ ( <i>hogšin inge</i> )	ホゲシン・アタ ( <i>hogšin at</i> )	ブール ( <i>buur</i> )	ホゲシン・ブール ( <i>hogšin buur</i> )		
老年	17歳以上						

※は交尾が可能になる段階をあらわす。△は去勢可能となる段階をあらわす。

2歳の幼畜は成長段階に応じてトルムという。基本的に性別で呼び分けることはしない。必要な場合は性別によって、メスはエメ・トルム (*em torom*)、オスはエル・トルム (*er torom*) と呼ばれている。それぞれモンゴル語の動物に用いるメスを意味する「エメ」とオスを意味する「エル」という言葉をトルムの前に付加して呼び分ける。

(2) 3歳以上のメスの名称

メスの分類の基準になっているのは、3歳の時である。

3歳のメスはグンズ (*gunz*) と呼ばれる。グンズはラクダ、ウマ、ヤギ、ヒツジ、ウシの五畜の3歳の段階を示すモンゴル語である。

メスは4歳から交尾が可能になる。4歳以上のメスは年齢とは関係なく、成長段階と交尾可能な時期に応じてすべてインゲ (*inge*) と呼ばれる。年齢と厳密にかかわると、4歳のメスはデウンジン・インゲ (*donzin inge*) と呼ばれる。デウンジン (*donzin*) とは、モンゴル語で五畜の4歳をあらわす名詞である。5歳から16歳の段階のメスを総称と同じくインゲという。17歳以上のメスをホゲシン・インゲ (*hogšin inge*) という。

メスの場合には、年齢による名称とは別に、出産の経験、搾乳の状況、妊娠など生殖活動をめぐる状態による名称の区別が細くなされているのが興味深い。バダインジリンのラクダ牧畜民は、インゲをさらには年齢とは関係なく出産の経験、搾乳の状況、妊娠の状況によって、表3のように呼び分けている。

表3 メス、インゲ (*inge*) の下位名称

	有	無
出産の経験	ハヤマル・インゲ ( <i>haymal inge</i> )	ドングイ・インゲ ( <i>dongui inge</i> )
搾乳の状況	ハイドル・インゲ ( <i>haidgul inge</i> )	
妊娠の状況	ホサラン・インゲ ( <i>husaran inge</i> ) 〈交尾中〉	ソバイ・インゲ ( <i>sobai inge</i> ) 〈妊娠できなかった〉
	ハイマル・インゲ ( <i>haimal inge</i> ) 〈妊娠中〉	エレメグ・インゲ ( <i>eremeg inge</i> ) 〈交尾しても妊娠しない〉

出産の経験がある個体をハヤマル・インゲ (*haymal inge*)、未経産の個体をドングイ・インゲ (*dongui inge*) と呼ぶ。ハヤマル (*haymal*) とは、モンゴル語の捨てられた状況を示す形容詞であり、ここでは仔ラクダを生んだことを示している。ドングイ (*dongui*) とは、モンゴル相撲の一つの技あるいはこの技によって負けた様子を表す言葉である。ここでは、アラシャー現地語での「出産の経験がない」という状況を示す用語として使われている。

搾乳と妊娠の有無によっても呼び分けられている。仔ラクダは死んだが、乳の出る個体をハイドル・インゲ (*haidgul inge*) という。ハイドル (*haidgul*) とは、モンゴル語で仔家畜が死んで、搾乳されている様子を表す形容詞である。ウシ、ヤギにも用いる。ハイドル・インゲは仔ラクダが死んだために、他の母ラクダよりも乳が多く搾れるので、当年の夏までずっと搾乳用として利用されるという。

交尾する時期の個体をホサラン・インゲ (*husaran inge*) という。ホサラン (*husaran*) とはモンゴル語の乳が出ているがまた交尾する時期のラクダ、ウマ、ウシに使われる言葉

である。交尾後実際には孕んだ個体をハイマル・インゲ (*haimal inge*) という。ハイマル (*haimal*) とは、モンゴル語の「見つかった」という意味を表す形容詞であり、仔ラクダができた状況を表す用語として使われる。妊娠する時期に妊娠できなかった個体をソバイ・インゲ (*sobai inge*) と呼ぶ。ソバイ (*sobai*) とは、五畜のなかの妊娠できなかった成長メスに用いる形容詞である。交尾しても拒否して妊娠しない個体をエレメグ・インゲ (*eremeg inge*) とそれぞれ呼びわけ。エレメグ (*eremeg*) とは、モンゴル語で「オスの特性がある」という意味の形容詞である。五畜のなかで、ラクダ、ウマ、ウシに使う。エレメグ・インゲのような異常な生態を示すメスは耐久性においてオスよりも優れているために、特に騎乗用に調教するといわれている。

### (3) 3歳以上のオス

オスの名称の分類の基準になっているのは、メスと同じく3歳の時である。

3歳のオスはグナン・タイラグ (*gunan tailag*) と呼ばれる (表2)。グナンとはメスのグنزに対応するものである。

オスは基本的に4歳から去勢になる。去勢オスのラクダを年齢と関係なくすべてアタ (*at*) という。さらに、年齢によって呼び分けることもある。4歳の去勢オスはシネ・アタ (*šin at*) と呼ばれる。その中のシネ (*šin*) はモンゴル語の「新しい」という意味である。5歳の去勢オスはジャー・アタ (*zaluu at*)、6歳から16歳の去勢オスをアタ、17歳以上の去勢オスをホゲシン・アタ (*högšin at*) とそれぞれ呼ばれる。若年、成年の去勢オスは調教されたか否かによって利用価値も異なる。去勢をおこないラクダを大人しくさせるが、去勢された個体をすぐ騎乗用、運搬用として利用することはほとんどない。そのため、去勢された個体の一部を調教する。調教された去勢は騎乗用、運搬用に利用される。調教されていない去勢は売却、屠畜など処理に供される。一方、調教の済んでいる去勢オスは未調教の若い去勢オスの伴走をさせるためにもよく利用される。

交尾可能になるまで、つまり去勢されていないオスを年齢と関係なく、タイラグという。4歳からは4歳のオスはデゥネン・タイラグ (*denen tailag*) と呼ばれる。デゥネンとはメスのデゥンジンと対応するもので、モンゴル語で五畜の4歳をあらわす名詞である。4歳の子供を言う場合もある。

オスは5歳から交尾が可能になる。通常、年齢とは関係なく、交尾可能な時期に応じて5歳以上の種オスはすべてブール (*buur*) と呼ばれる。年齢とかがわってみると、5歳の種オスはブーラン・タイラグ (*buuran tailag*)、6歳から16歳の種オスはブール、17歳以上の種オスはホゲシン・ブール (*högšin buur*) と呼ばれる。種オスは年齢が高くなることにしたが、種オスとしての生殖機能が衰えたが、発情期には他の種オスのじゃまをする。また、同じ種オスを群れの中に長い間入れたら群れ全体のラクダの血統と品質が劣れる可能性がある。そのためには、種オスを2、3年間使ったら、去勢するかあるいは交換、売却など処理に供される。

### 4. 毛による名称

ラクダの毛はその部位と色によって、それぞれ名称が異なる。

まずは、毛をモンゴル語でノース (*noos*) という。さらに毛はラクダの身体部位によつ

て異なる名称をもつ(資料1)。ひげをサハレ (*sahal*)、まつげをソルムス (*sormuus*)、頭の毛をウレブゲ (*orbeg*)、首筋の毛をシリン・ノース (*sin noos*)、コブの毛をブヘイン・トガ (*bəhin tog*)、本体の毛をゴル・ノース (*gol noos*)、尻尾の毛をスウーレイン・サチュガ (*sulin sachig*)、腹の毛をゲデスン・ノース (*gedesun noos*)、膝の毛をエブデゲイン・ノース (*əbdegin*)、首の毛をジョグドル (*jogdor*) という(資料1:ムンクジルガラ2006)。

毛質には柔毛と硬毛の二種類ある。柔毛はモンゴル語でノールール (*nooluur*)、硬毛をソル (*sor*) と呼ぶ。ラクダのひげ、まつげ、頭髪、首筋、コブ、尻尾、膝、首の毛は硬毛で、本体と腹の毛は柔毛である。

ラクダの毛色は単色と二色である。本体の柔毛の色と首の硬毛の色でラクダの色を判断する。ラクダの毛色を示す基本的な名称は10種類である(表4)。これらの10種類の毛色には、オラン(赤)、オラバル・シャル(赤黄)、フレン(茶褐色)、ハラ(黒)、ハラ・フレン(黒茶色)、シャル(黄色)、ホワー・シャル(浅黄色)、フヘ(青)、ツァガー(白)、シャルガチ(卵色)がある。

表4 ラクダの毛の色による名称

毛の色による名称(モンゴル語表記)	毛色の特徴	毛色の直訳
オラン・テメー ( <i>ulaan temee</i> )	単色	赤
オラバル・シャル・テメー ( <i>ulaabar šar temee</i> )	二色	赤黄・赤
フレン・テメー ( <i>hureng temee</i> )	単色	茶褐色
ハラ・テメー ( <i>har temee</i> )	単色	黒
ハラ・フレン・テメー ( <i>har hureng temee</i> )	二色	黒茶色・黒
シャル・テメー ( <i>šar temee</i> )	単色	黄色
ホワー・シャル・テメー ( <i>hua šar temee</i> )	二色	浅黄色・白
フヘ・テメー ( <i>həh temee</i> )	単色	青
ツァガー・テメー ( <i>cagaan temee</i> )	単色	白
シャルガチ・テメー ( <i>šaragc temee</i> )	単色	卵色

オラン・テメーとは全身が赤の毛色のラクダを指す。

オラバル・シャル・テメーとは全身が赤黄で、首と膝の毛が赤く見えるラクダを指す。

フレン・テメーとは全身が茶褐色で、首の毛が深く赤い色に見えるラクダを指す。

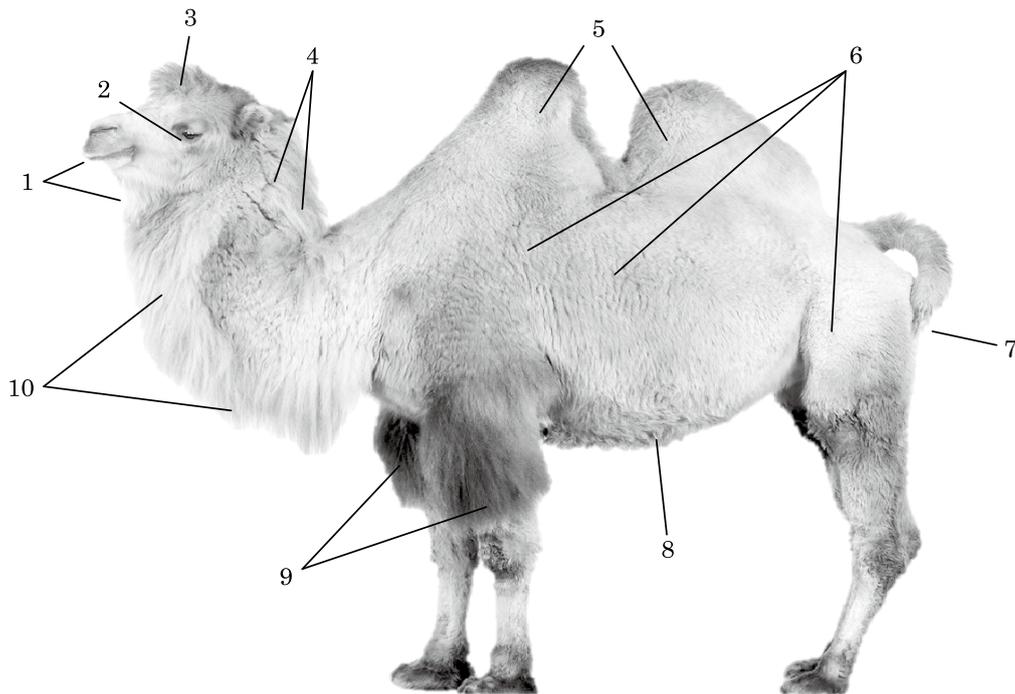
ハラ・テメーとは全身が黒で、遠くから首と膝の毛が黒く見えるラクダを指す。

ハラ・フレン・テメーとは全身が黒茶色で、首の毛が黒く見えるラクダを指す。

シャル・テメーとは全身が黄色で、毛先と毛元が同じ色のラクダを指している。ハラ・フレン・テメーとは全身が黒茶色で、首の毛が黒く見えるラクダを指す。

フヘ・テメーとは全身の毛が青のラクダを指す。

ツァガー・テメーとは全身が白いラクダを指し、シャルガチ・テメーとはうすい黄色のラクダを指す。



資料1 ラクダの身体部位による体毛の名称

資料写真: アラシャー・フタコブラクダ(2013年8月筆者撮影)

出典: 部位による名称はムンクジルガラ(2006)により筆者作成

【硬毛】

1. サハレ (*sahal*): ひげ
2. ソルムス (*sormuus*): まつげ
3. ウレブゲ (*orbeg*): 頭髪
4. シリン・ノース (*shirin noos*): 首筋の毛
5. ブヘイン・トガ (*bəhin tog*): コブの毛
7. スウーレイン・サチュガ (*suulin sachig*): 尻尾の毛
9. エブデゲイン・ノース (*əbdegin noos*): 膝の毛
10. ジョグドル (*jogdor*): 首の毛

【柔毛】

6. ゴル・ノース (*gol noos*): 本体の毛
8. ゲデスン・ノース (*gedesen noos*): 腹の毛

### 5. コブによる名称

ラクダはほかの家畜と違ってコブを持っている。ラクダのコブをモンゴル語でブヘ(*boh*)という。牧畜民は、コブの特徴とその様子によって2歳以上のラクダを呼び分ける(資料2)。これは、2歳以上の個体のコブの形と様子が完全に特徴づけられ、見て簡単に判断できるからである。

ラクダを飼育する地域によってコブの形による名称は異なる [C. プヤントグトフ 1988]。調査地で使われているコブの名称は12種類である(表5)。

セレー・ブヘタイ・テメーはフタコブが上縦になっているラクダを指す。セレー(*seree*)とは、モンゴル語でフォークの意味である。ラクダのコブがフォークのような形である様子を表している。

表5 コブの形による名称

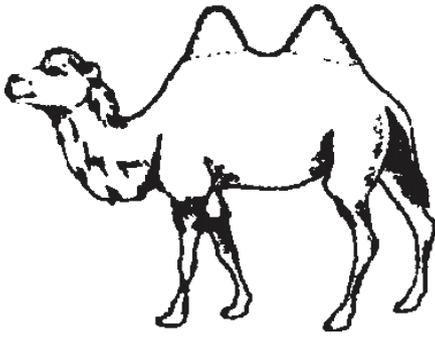
名称 (モンゴル語表記)	コブの特徴
セレー・ブヘタイ・テメー ( <i>seree bəhtai temee</i> )	フタコブが上縦になっている
ソヨー・ブヘタイ・テメー ( <i>soyoo bəhtai temee</i> )	前のコブが上縦で、後ろのコブが片側に傾いている
ソリボィ・ブヘタイ・テメー ( <i>solbiu bəhtai temee</i> )	フタコブがそれぞれ両側に傾いている
レゲ・ブヘタイ・テメー ( <i>leg bəhtai temee</i> )	フタコブが大きく、傾きやすい
アヤス・ブヘタイ・テメー ( <i>ayas bəhtai temee</i> )	フタコブが同じ片側に傾いている
チャラガイ・ブヘタイ・テメー ( <i>calgai bəhtai temee</i> )	フタコブ間の距離が遠い
サブハン・ブヘタイ・テメー ( <i>sabhan bəhtai temee</i> )	フタコブが細く、上縦になっている
ソゾン・ブヘタイ・テメー ( <i>sozon bəhtai temee</i> )	フタコブが細く、上縦になっている
ホレボー・ブヘタイ・テメー ( <i>holboo bəhtai temee</i> )	フタコブ間の距離が近い
ホイト・ブヘ・セレー・テメー ( <i>hoitboh seree temee</i> )	後ろのコブが上縦で、前のコブが片側に傾いている
ウメネ・ブヘ・レゲ・テメー ( <i>əmənbəh leg temee</i> )	前のコブが大きく、両側に傾きやすい
ウメネ・ブヘ・ソリボィ、オイト・ブヘ・セレー・テメー ( <i>əmənbəh solbiu hoitboh seree temee</i> )	前のコブが両側に傾いている、後ろのコブが上縦
シャムン・ブヘタイ・テメー ( <i>šaamn bəhtai temee</i> )	前のコブが頭方に傾いている

ソヨー・ブヘタイ・テメーは前のコブが上縦で、後ろのコブが片側に傾いているラクダを指す。ソヨー (*soyoo*) とは肉食獣の犬歯のことをいう。犬歯の形でラクダのフタコブの形を表している。

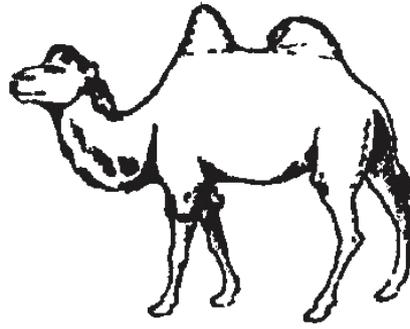
ソリボィ・ブヘタイ・テメーはフタコブがそれぞれ両側に傾いているラクダを指す。ソリボィ (*solbiu*) とは、モンゴル語で二つの物が同じ位置にあるが、同じ方向ではない様子を表す形容詞である。

レゲ・ブヘタイ・テメーはフタコブが大きくて、傾きやすいラクダを指す。レゲ (*leg*) とは、垂れている様子を表す形容詞であり、ラクダのコブが大きくて垂れていることをいう。

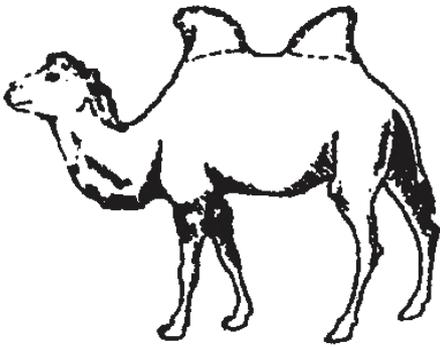
アヤス・ブヘタイ・テメーはフタコブが片側に傾いているラクダを指す。アヤスとは、モンゴル語で人間の物事や人に素直に従う性格を示す。この用語を用いて、ラクダのフタ



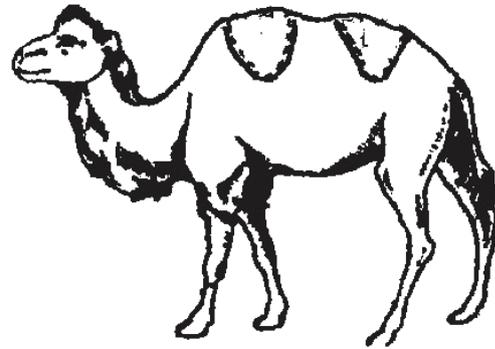
セレー・ブヘタイ・テメー



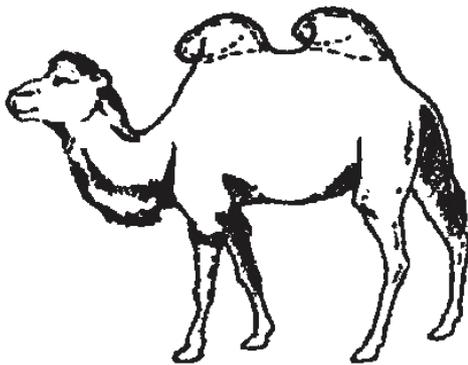
ソヨー・ブヘタイ・テメー



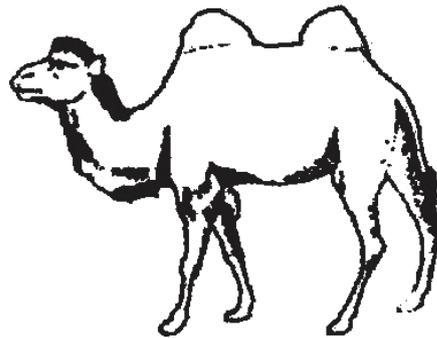
ソリボイ・ブヘタイ・テメー



レゲ・ブヘタイ・テメー

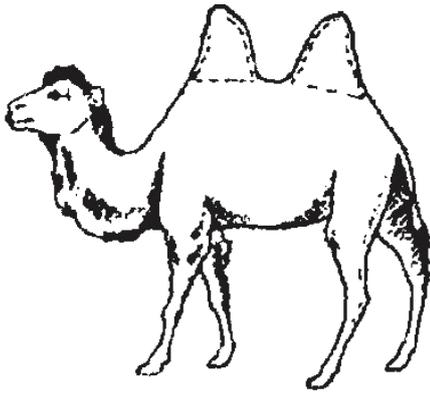


アヤス・ブヘタイ・テメー

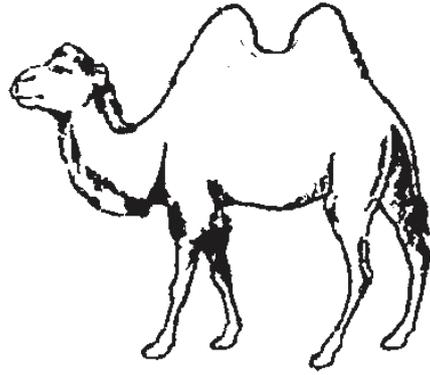


チャラガイ・ブヘタイ・テメー

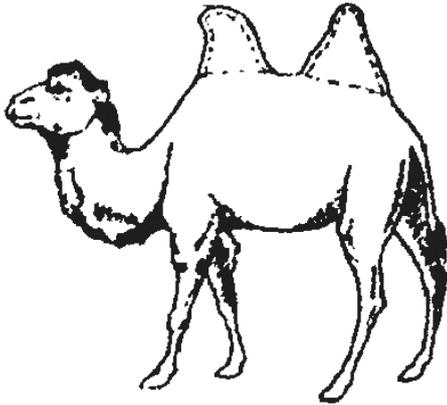
資料2 ラクダのコブの形とその名称



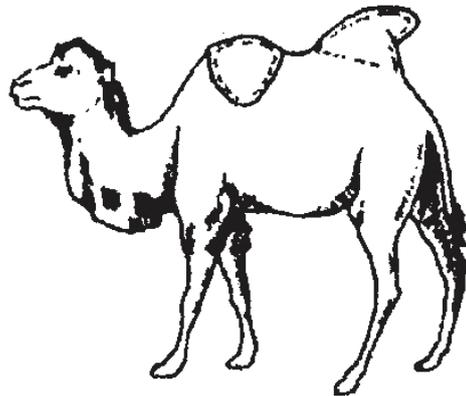
サブハン・ブヘタイ・テメー  
(ソゾン・ブヘタイ・テメー)



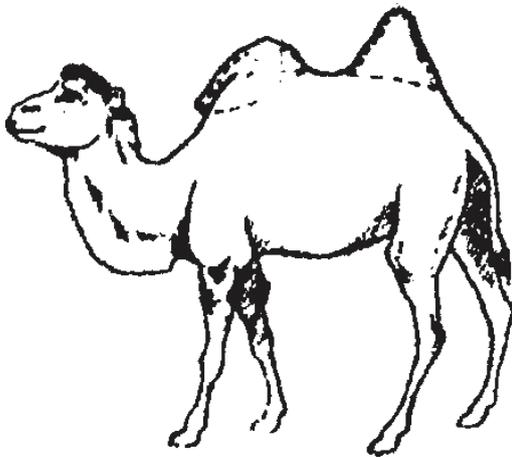
ホレボー・ブヘタイ・テメー



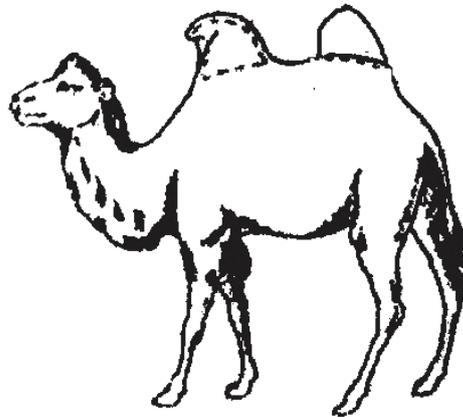
ホイト・ブヘ・セレー・テメー



ウメネ・ブヘ・レゲ・テメー



ウメネ・ブヘ・ソリボイ、オイト・ブヘ・セレー・テメー



シャムン・ブヘタイ・テメー

コブが同じ片側に傾いている様子を表している。

チャラガイ・ブヘタイ・テメーはフタコブ間の距離が遠いラクダをいう。チャラガイ (calgai) とは、遮るものなく広いという意味である。

サブハン・ブヘタイ・テメーはフタコブが細く、上縦になっているラクダをいう。サブハン (sabhan) とは箸の意味である。箸のように細くてまっすぐな様子でコブを表している。

ソゾン・ブヘタイ・テメーはサブハン・ブヘタイ・テメーと同じコブの形のラクダを指す。しかし、コブがソゾンと似ている。ソゾン (sozon) とは、中国の甘粛、内モンゴル、新疆の砂漠地帯で見られる肉質の寄生植物キノモリウム科オシャグジタケである<sup>16)</sup>。

ホレボー・ブヘタイ・テメーはフタコブ間の距離が近いラクダをいう。ホレボー (holboo) とは、物と物の間がつながっている状況を表す言葉である。

ホイト・ブヘ・セレー・テメーは後ろのコブが上縦で、前のコブが片側に傾いているラクダをいう。ホイト (hoit) とは後ろの意味である。ラクダの後ろのコブがフォークのような形である様子を表している。

ウメネ・ブヘ・レゲ・テメーは前のコブが大きくて、両側に垂れているラクダを指す。ウメネ・ブヘ・ソリボィ、オイト・ブヘ・セレー・テメーは前のコブが両側のどっちかに傾いている、後ろのコブが上縦のラクダを指す。

シャムン・ブヘタイ・テメーは前のコブが頭方に傾いているラクダを指す。シャムン (šaamn) とは、ラマ教の僧侶がかぶる帽子である。

## 6. 体格による名称

牧畜民はラクダを識別する際に、3歳以上のラクダの胸、骨格、四肢、首、尻、足などの特徴から体つきを識別する。これは、3歳以上のラクダは体が成長し、識別する特徴がはっきり見えるためである。

ラクダの体つきをモンゴル語で「ベイ・ガラビリ (beye galbir)」という。ラクダを飼育する地域によってラクダの体つきによる名称は異なる<sup>17)</sup>。現地調査で、総計13種のラクダの体つきによる名称を収集した(表6)。

オチョゴル・テメーは、胸が高くて尻が低いラクダをいう。オチョゴル (ocgor) とは、モンゴル語で山と岩の険しい状態を表す形容詞である。現地ではラクダの体つきの身長の高い様子を示す言葉として用いている。

ヤレハガル・テメーは、骨格が太い、腹が大きい、体が低いという特徴をもつラクダをいう。ヤレハガル (yalhgar) とは、モンゴル語で大きいという意味である。

ドンゴゴル・テメーは、胸部分が低く、尻が高いラクダを指す。ドンゴゴル (donggor) とは、モンゴル語で人や動物の尻が高い特徴を現す形容詞である。

ゾンズガル・テメーは、四肢が長くて体が小さいラクダをいう。ゾンズガルとは、物の小さい状態を示す形容詞である。

<sup>16)</sup> 学名は *Cynomorium songaricum* Rupr. である。モンゴル標準語ではオーランゴヨー (ulangoyoo) という。ただし、アラシャー盟ではソゾンと呼ばれることが多い。

<sup>17)</sup> C.ブヤントグトフはラクダの体つきによる名称について合計38種の名称を記録している [C.ブヤントグトフ1988: 201-202]。ムンクジルガラは全アラシャー盟での収集を通じて、合計13種を記録している [ムンクジルガラ2006: 93-94]。

テンテゲル・テメーは、四肢が長くて体が大きいラクダをいう。テンテゲルとは、モンゴル語で人と動物のまるく太っている様子を表す形容詞である。

チュデゲル・テメーは、骨格が小さくて、腹が大きいラクダをいう。チュデゲルとは、モンゴル語で体格が小さくて、腹が丸く太っている様子を表す形容詞である。

表6 体つきによる名称

名称 (モンゴル語表記)	体つきの特徴
オチョゴル・テメー ( <i>ocgor temee</i> )	胸が高い、尻が低い
ヤレハガル・テメー ( <i>yalhgar temee</i> )	骨格が太い、腹が大きい、体が低い
ドンゴゴル・テメー ( <i>donggor temee</i> )	胸部分が下の方、尻が高い
ゾンズガル・テメー ( <i>zonzgar temee</i> )	四肢が長い、体が小さい
テンテゲル・テメー ( <i>tentger temee</i> )	四肢が長い、体が大きい
チュデゲル・テメー ( <i>cudger temee</i> )	骨格が小さい、腹が大きい
タンハガル・テメー ( <i>tanhgar temee</i> )	首が長い、体が高い
マイガ・テメー ( <i>maiga temee</i> )	前足が内側に向いている
ラガラガル・テメー ( <i>laglgar temee</i> )	四肢が短い、体が大きい、肉が多い
パガダガル・テメー ( <i>pagdgar temee</i> )	四肢が短い、体が小さい、肉が多い

タンハガル・テメーは、首が長くて、背が高いラクダをいう。タンハガルとは、モンゴル語で人の背が高い様子を表す形容詞である。

マイガ・テメーは、前足が内側に向いているラクダをいう。マイガとは、モンゴル語で歩行するとき、両足が外に曲がっている様子を表す形容詞である。

ラガラガル・テメーは、四肢が短い、体が大きい、肉が多いという特徴をもつラクダをいう。ラガラガルとは、モンゴル語で太くて大きい様子を表す形容詞である。

パガダガル・テメーは、四肢が短い、体が小さい、肉が多い特徴をもつラクダをいう。パガダガルとは、モンゴル語の背が低くて太い様子を表す形容詞である。

## 7. 足跡による名称

モンゴル語で、ラクダの足裏をタバガ (*tabag*)、爪をホムス (*humus*) という。足裏の紋および形、爪の大きさ、歩く力がそれぞれ個体によって異なるため、足跡も異なるという (表7)。ラクダの足跡をムレ (*mor*) と呼ぶ。

ドグイ・ムレタイ・テメーは、足跡が丸くみえるラクダをいう。両前足の蹄の形が丸いという特徴から判断している。ドグイと (*dugui*) は、モンゴル語で「丸い」という意味である。

ドゥルベレジン・ムレタイ・テメーは、足跡が長くみえるラクダをいう。ラクダの両後足の蹄の形から識別している。ドゥルベレジン (*dorbeljin*) とは、モンゴル語の四角いという意味である。

表7 足跡による名称

名称（モンゴル語表記）	特徴
ドグイ・ムレタイ・テメー ( <i>dugui mǎrtai temee</i> )	両前足の蹄の形が丸い
ドゥルベレジン・ムレタイ・テメー ( <i>dǎrbeljin mǎrtai temee</i> )	両後足の蹄の形が長っぽい
シュブゲレ・ムレタイ・テメー ( <i>šubuger mǎrtai temee</i> )	爪の元が合って、足跡が尖って見える
ホレボー・ホムスタイ・テメー ( <i>holboo humustai temee</i> )	爪の先がくっついている
サラバガル・ホムスタイ・テメー ( <i>sarbagar humustai temee</i> )	爪がくっついていない、ばらばら

シュブゲレ・ムレタイ・テメーは、足跡が尖って見えるラクダをいう。爪の元が合っているラクダの足跡である。シュブゲレ (*šubuger*) とは、モンゴル語の尖っている様子を表す形容詞である。

ホレボー・ホムスタイ・テメーは、爪の先が接合している様子の足跡をもつラクダをいう。ホレボー (*holboo*) とはモンゴル語でつながりの意味である。

サラバガル・ホムスタイ・テメーは、爪の先が接合しておらず、広く離れている特徴をもつラクダをいう。サラバガル (*sarbagar*) とは、モンゴル語で木の枝のように外へ伸びている様子を表す形容詞である。

### おわりに

本稿は、モンゴル牧畜社会において牧畜の対象となっているラクダを取り上げ、内モンゴル自治区アラシャー盟アラシャー右旗バダインジリン砂漠に暮らすモンゴル牧畜民を事例として、ラクダの個体を表現する呼称を具体的に成長段階、年齢と性別、毛、コブ、体つき、足跡という6つの面から詳細に記述したものである。ラクダの個体を表現する呼称を記述することを通じて、牧畜文化の一側面を理解しようとすることを目的とした。

その結果としては、バダインジリン砂漠地域に暮らしている牧畜民のラクダの識別システムは類別のカテゴリーと個別のカテゴリーという二つの識別システムによる個体を表現する呼称が存在することが明らかになった。まず、ラクダを成長段階、年齢と性別によって成長段階による名称、性別による名称、性別と年齢をセットした名称という三つに分類している。これらの名称に関する知識は一人前の牧畜民になるために必要な知識として、牧畜民から牧畜民に継承されてきた社会的な共有知識である。家畜の個体識別およびその個体を表現する名称における類別のカテゴリーに属する知見である。

次は、ラクダを個別に識別するためのものであり、毛、コブ、体つき、足跡による名称である。これらは牧畜民がラクダの個体識別と管理を行う個人的な知識といえる。牧畜民はラクダの毛と毛色、コブの特徴、足跡の特徴を長い間観察力と認識方法によって、独自で多様な呼称群を育んできた。これは個別のカテゴリーであるといえる。しかも牧畜民はラクダを識別する上でのラクダの特徴は1ないし2つがほとんどで、3つ以上の特徴を名

称で表現することはない。

ラクダの個体の特徴を把握するには毛色が重要な意味を持つ。その呼称は毛色の単色と二色によって異なるが、基本的には本体の毛色に基づき命名する。そして、ラクダをコブによって識別し、その名称で個体を表現することは重要である。コブの特徴は体格と足跡の特徴より識別しやすいため、ラクダの個体を表現する名称の中でコブによる名称は最も重要である。また、ラクダの体格と足跡、特に足跡を認識することはほとんど牧畜民の経験によるものであり、その名称を使用し個体を表現することは年配の経験のある牧畜民のみである。

今後の課題として、バダインジリン砂漠地域に暮らしている牧畜民のラクダに関する個体識別方法をほかの牧畜地域と比較研究をおこない、その個体識別方法の差異がどのような観察や実践に基づくものなのかを明らかにすることである。また、ラクダの個体識別に関するさらなる事例研究を積み上げていく必要があると考えられる。

#### 参考文献

##### 【日本語】

- 今村薫 (2012) 「ラクダ遊牧民の家畜管理」『名古屋学院大学文集 人文・自然科学篇 49 巻』、31-47。  
 稲村哲也 (1995) 『リヤマとアルパカーアンデスの先住民社会と牧畜文化』、花伝社  
 梅棹忠夫 (1990) 『梅棹忠夫著作集 モンゴル研究』、東京：中央公論社  
 児玉香菜子 (2012) 『「脱社会主義政策」と「砂漠化」状況における内モンゴル牧畜民の現代的変容』、アフロ・ユーラシア内陸乾燥地文明研究会。  
 鷹木恵子 (2009) 「オアシス」『沙漠の事典』、日本沙漠学会編  
 高倉浩樹 (2000) 『社会主義の民族誌—ベリア・トナカイ飼育の風景』、東京都立大学出版社  
 波佐間逸博 (2015) 『牧畜世界の共生論理—カリモジョンとドドスの民族誌』、京都大学学術出版社  
 堀内勝 (1986) 『ラクダの文化誌—アラブ牧畜文化考』、リプロポート  
 (2015) 『ラクダの跡—アラブ基層文化を求めて』、第三書館  
 吉田睦 (2006) 「ツンドラ・ネネツのトナカイ牧畜：群管理の構造と実態」『千葉大学ユーラシア言語文化論集』9 (2006)：31-56。

##### 【モンゴル語】

- Munhjiirgal (2006) *Alsha temeem soyol ober mongoliin soyoliin hebleliin horiya.* (ムンクジールガラ 2006 『アラジャーラクダ文化』内モンゴル文化出版社)  
 S.jambaldorji (2008) *Temee tengeriin amitan ober mongoliin aradiin hebleliin horiya.* (セ・ザンバレドルジ 2008 『ラクダ—天の動物』内モンゴル人民出版社)  
 C.burintogtoh (1988) *Tabun hoshuu maliin neriidel ober mongoliin shinjileh uhan tseneg mergejiliin hebleliin horiya.* (C. ブヤントグトフ 1988 『五畜命名要術』内モンゴル科学技術出版社)

##### 【中国語】

- 阿拉善盟地方誌編纂委員会 1998 『阿拉善盟誌』方志出版社  
 阿拉善右旗地方誌編纂委員会 2000 『阿拉善右旗誌』内蒙古教育出版社。  
 阿拉善盟統計局資料 2010 第6回人口調査統計  
 非公刊資料 巴丹吉林嘎查基本情況。

##### 【URL】

- <http://baike.so.com/doc/5533347.html> 阿拉善 (最終閲覧 2017 年 6 月 3 日)  
<http://www.alsyq.gov.cn/> 阿拉善右旗 (最終閲覧 2017 年 6 月 7 日)  
[http://www.gov.cn/gzdt/2013-10/30/content\\_2517690.htm](http://www.gov.cn/gzdt/2013-10/30/content_2517690.htm) 中国政府網 (最終閲覧 2017 年 6 月 8 日)

##### 【辞書】

- Shi donrub (2002) *Orchin uyeiin mongol helenai toli ober mongoliin surgan humujiliin hebleliin horiya.* (シ・ドナルブ 2000 『現代モンゴル語辞典』内モンゴル教育出版社)